本ワークショップでは，学会とは違った雰囲気で先生方や学生と交流ができ，また藻類の知識を深めることができただけでなく，様々なことを感じとることができた二日間となりました。特に，参加者それぞれの研究対象への情熱を肌で感じ，自分の海藻愛はまだまだ足りないのではないかと強く思いました。また，自分の知識量が足りないことも再認識できました。さらに，海藻の情報交換や今後の研究について様々なアドバイスをいただくことができ，非常に濃密な時間を過ごすことができました。次回のワークショップも必ず参加しようと思いました。そして，次回も有意義な情報交換ができるよう，頑張って研究を進めるだけでなく幅広く藻類の知識を深めていこうと決意しました。

最後に，この企画・準備・運営にご尽力いただいた九州大学の川口栄男先生，栗原暁先生，ワークショップⅡ講師陣の諸先生方，九州大学大学院農学研究院附属水産実験所職員の皆様にこの場を借りて深く感謝申し上げます。

（東京海洋大学）

藻類学ワークショップⅡ参加者一覧（五十音順，敬称略）

【学生】秋田 晋吾（東京海洋大）・上嶋 崇嗣（山梨大）・牛島 圭（九州工業大）・腰田 有（北海道大）・丹羽 一夫（福井県立大）・中村 誠司（山梨大）・中村 方哉（筑波大）・Wilfred J. E. Santiañez（北海道大）

【一般】石本 美和（一般財団法人 地球・人間環境フォーラム）・上井 進也（新潟大）・加藤 亜記（広島大）・小亀 一弘（北海道大）・白石 英秋（京都大）・芹澤 如比古（山梨大）・松岡 孝典（日本歯科大）・丸島 和也（キッコーマン株式会社）・脇坂 港（九州工業大）

【講師】岩滝 光儀（東京大）・神谷 光伸（福井県立大）・川口 栄男（九州大）・河地 正伸（環境研）・鈴木 秀和（東京海洋大）・高橋 和也（山形大）・藤田 大介（東京海洋大）

【淡水藻ガイド】飯田 大和（オキチモズクを見守る会）・遠藤 淳（遠藤金川堂）

【世話人】栗原 暁（九州大）

海藻班の観察・同定（写真提供：上井進也氏）

磯採集

日本藻類学会第 39 回福岡大会を降り返って

栗原　暁

縁あって第 39 回福岡大会の準備委員として大会準備・運営に携わることとなった。円滑に終われるよう微力ながら準備を進めてきたが，各参加者が持たれた印象はどんなものだったのだろうか。大事には至らなかったが，不便に感じた参加者も多かったのではないかと思う。例えば，狭い一般発表会場，出力が弱すぎるレーザーポインター，分かりづらいポスター発表会場案内板，ワークショップⅡの準備不足など，挙げればきりがない。箱崎キャンパスでの開催で年代物の講義棟を使わざるを得なかった事情を除けば，大方，筆者の至らなさが招いた結果である。ここに謹んでお詫び申し上げる。万が一，また学会開催のお声がかかったときには今回の反省を活せたらと思う。以下，簡単ながら本学会の開催内容について振り返りたい。

本大会への参加者は 252 名（一般 152 名・学生 86 名・招待 5 名・高校生 8 名＋引率教員 1 名）で，そのうち海外からの参加は米国 1 名，韓国 2 名であった。本大会では，高校生による発表申込が 1 件あった（滋賀県立守山高等学校・文部科学省スーパーサイエンスハイスクール指定校）。発表は学会員に限るのが原則だが，非会員である高校生の発表について学会執行部で協議してもらい，本大会では例外的に参

加を認めることとなった。具体的には，引率教員 1 名と発表する生徒全員を特別招待とし，会期中の全講演を聴講できるものとした。ただし，引率教員二人目からは一般会員料金を徴収し，酒宴である懇親会の参加は認めない（引率教員を含む）ことを本実行委員会独自のルールとして相手校へ伝えた。過去の藻類学会で高校生発表の場があったかどうか定かでないが，これからの藻類学発展を担うであろう高校生に対して，高校生発表をどのように支援していくのか，藻類学会として取り決めておく必要があると感じた。

本大会もほぼ例年どおりの構成となり，編集委員会と評議員会を大会前日の午後から開催，一般講演は二日制（２会場）とし，初日に公開特別講演会，総会，懇親会，二日目に藻類学ワークショップ I，ミニシンポジウムを開催した。一般講演 150 題（口頭 70・ポスター 80）は当初の予想より多めとなった。どのようなプログラム構成となるか状況が読めなかったため，11 月の開催告知文には「60 ～ 70 演題を予定」と幅を持たせて載せたのだが，実際には 60 演題が無理のない数だったと思う。口頭発表希望者の要望を叶えるためけっこう無理をした。そのため，藻類学ワークショップ I を一般発表と平行して開始せねばならず，双方の演者，聴衆者に迷惑をかける結果となった。

総会終了後，福岡リーセントホテルへ場所を移した懇親会では，田中次郎会長の挨拶のあと，吉田忠生先生の音頭で乾杯をして宴となった。昨年秋に開催した日本水産学会秋季大会の交歓会でも当ホテルを利用した経緯もあり，ホテル側からは随分と取り計らいがあったと思う。ただ，地方大会の名物になっている特産物や銘酒の振る舞い，余興を一切の排除したせいか，全く華やかさを欠いた懇親会となってしまった。経費削減のためとはいえ，期待されていた方には申しわけないことをした。そのぶん落ち着いて会話に集中できたのではと思っているが，参加した方々がどんな感想を持たれたか，主催者としては非常に気になるところである。

一般講演以外の大会企画として，大会初日に公開特別講演会（九州大学大学院農学研究院との共催）を開催した。植田充美教授（京都大）をお招きし，「大型藻類の未来ポテンシャルを求めて」と題した非可食褐藻クロメを主とした大型藻類を利用したバイオリファイナリーに関する最新の知見と展望についてご講演いただいた。また，大型藻類バイオリファイナリ研究に関連したミニシンポジウム 1 件 4 演題（世話人：柴田敏行・三重大，川口栄男・九州大）を開催した。毎年開催要望の高い藻類学ワークショップは，当実行委員会の余力がなかったことから，河地正伸さん（国立環境研究所）に全体の企画立案をお願いし，ワークショップ I では「藻類の和名について考える（セミナー形式）」，ワークショップ II では「福岡の藻類採集・観察会」を実施する運びとなった。各ワークショップの詳しい話は，別途この号に掲載されると思うので，そちらをお読みいただきたい。

ワークショップ II では，海藻・海産微細藻類の観察会（第一部）と淡水紅藻観察会（第二部）に分けて開催したのだが，手違いで第二部の参加記が集まらなかったため，ここで補足する。福岡県朝倉市周辺は，スイゼンジノリ，オキチモズク，チスジノリといった希少淡水藻類が観察できる福岡唯一の地である。特にスイゼンジノリは，現地と熊本県の養殖場でのみ生育している状態で，その養殖場を取り巻く環境も決して楽観できるものではない。本ワークショップでは，ご当地ネタとしてこのような状況を理解してもらうことを期待して淡水藻観察会を計画した。黄金川でスイゼンジノリ養殖を行っている遠藤淳さん（遠藤金川堂）には養殖現場と加工場の見学会を，また朝倉市でオキチモズクの保護活動をされている飯田大和さん（オキチモズクを見守る会）には小石原川の脇を流れる農業用水路で発見された生育地の観察会のガイド役を約 1 時間半ずつ引き受けていただいた。第一部から引き続いての参加者は 8 名と少なかったものの，概ね好評だったと思っている。

学会会長から九大での開催について打診いただき，船橋大会を視察してから，福岡大会開催まで約 1 年の準備期間があったものの，平成 26 年 9 月に九大箱崎キャンパスで開催された日本水産学会秋季大会の開催準備に忙殺され，結局，実際に動き始めたのは 10 月からであった。実行委員会の立ち上げ，銀行口座開設，大会告知・大会プログラム集の原稿作成，参加申込書の整理・入金確認・返信，講演プログラム編成，その他もろもろの準備に翻弄され，赤字経費に怯え，遅々として進まぬ準備に頭を抱え，何でもかんでも背負い込もうとする自分の性格を恨んだりもしたが，それでもなんと

スイゼンジノリ養殖場にて（写真提供：白石英秋氏）

オキチモズク生育地にて（写真提供：白石英秋氏）

か乗り切れたのは，ひとえに栗原のお願いを聞いてくださった多くの学会員のおかげである。

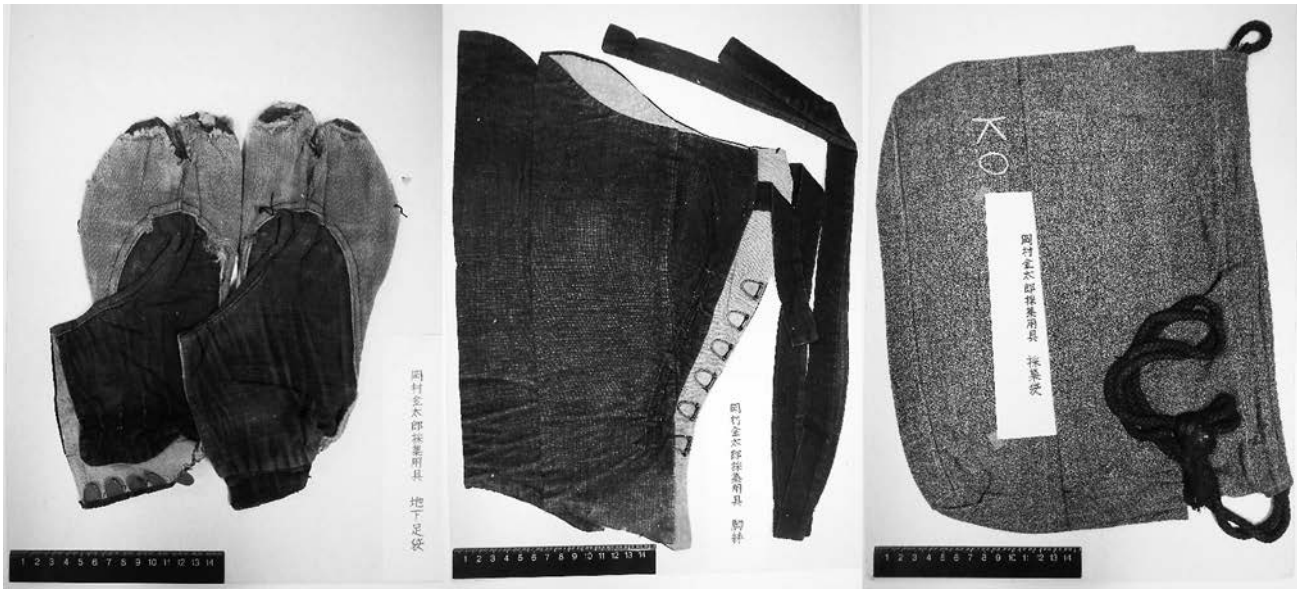
島袋寛盛さん（瀬戸内水研）には他県であるにも関わらず大会実行委員を引き受けてもらい，講演プログラム作成の折には時間を割いて尽力いただいた。中山剛さん（筑波大学）には，本大会でも講演プログラムの版下作成を引き受けていただいた。また，講演プログラム編集や座長候補選定についてご意見をいただいた諸先輩方（あえて匿名），突然の座長依頼にもかかわらず快く引き受けて下さった 24 名の学会員の協力なしには，印刷原稿提出期限はおそらく守られることはなかったと思う。九州大学各部局（本部入試課，農学部アニマルサイエンス分野，理学部生物学科，歯学部学生係，薬学部学生係）からはポスター発表用ボードをお借りすることができた。お陰でかなりの経費削減 につながった。藻類学ワークショップ全体の企画立案を引き受けてくださった河地さん（前出），藻類学ワークショップ II の会場を提供してくださった九州大学大学院農学研究院附属水産実験所，淡水藻観察会のガイド役お二人を引き合わせてくださった当研究室の OB でもある吉田忠生先生にもこの場を借りて厚くお礼申し上げる。

末筆ながら，日本藻類学会庶務幹事の方々には大会準備の段階で様々な相談に乗っていただいた。また，突然の大会実行委員副委員長要請を引き受けてくださった福岡女子大学の山田真知子さんには大会運営でご尽力いただいた。大会直前の準備作業ならびに大会運営では，福岡女子大学の環境生物学研究室，九州大学農学部の学生諸氏（岩切彰吾･大石隆一･岡村海咲・木屋哲郎・後藤靖裕・中島有紀子・濱崎智美・松瀬智晶・水戸谷勇樹・山口翔子・脇坂拓芳，五十音順）には十分すぎるほどの作業をこなしてもらった。それぞれの方に深謝申し上げる。なお，初の赤字決算かと心配された大会運営だったが，倹約と数多くの当日参加申込のおかげで健全会計で終われたことを報告する。

（九州大学）

岡村先生の採集道具

没後 80 年を迎えた岡村金太郎先生（1867—1935）が使用された採集道具を紹介したい。岡村先生がとりわけ足繁く通ったのは相模湾で，そのなかでも江の島は『海藻の江の島』(1923) と題した随筆に「全く江の島は名所の江の島でもあり海藻の江の島でもある」と書くほど気に入っていた。観光地で海藻を採集する研究者が挙動不審にみえるのは今も昔も変わらないようで，「何千何萬人と云ふ（見物人のいる）中で草鞋脚絆（わらじきゃはん）に身をかため，時には尻に窓のあるヅボンに採集胴籃（どうらん）を肩にし，辨當（べんとう）首に風呂敷で巻き付け」た姿で採集する自分を「（観光地に）一種異様の風態をしていくのは我々海藻採集家」と自虐的に表現している。そのときのものかどうかは分からないが，岡村先生の足袋，脚絆，採集袋が，旧植物分類学教室の血筋を引き継ぐ北海道大学大学院理学研究院生物科学部門多様性生物学分野系統進化学講座 II に保管されていた。撮影を許可してくださった同講座の小亀一弘先生に感謝申し上げる（北山）



岡村先生の採集用具：足袋（左），脚絆（中央），採集袋（右）。北海道大学大学院理学研究院系統進化学講座 II 所蔵。